

福岡県旧山門郡瀬高町方言みちしるべ

金子 光茂

1. 本稿の目的

本稿は、福岡県柳川市方言(以下、柳川方言)を引き合いに出しつつ筆者(1948年生れ)が誕生から18歳まで過ごした旧柳川藩領山門(やまと)郡瀬高町(現福岡県みやま市瀬高町)の方言(以下、瀬高方言)の一端を紹介してみようという試みである。

2. 福岡県みやま市瀬高町の所在と歴史

瀬高町は今日、東は八女市、西は柳川市、南は2つの町が隣接して南東部が山川町、南西部が高田町、北は矢部川を挟んで筑後市(旧久留米藩領)と接している。

近隣のこの位置関係は、廃藩置県後、旧城下だった柳川市に瀬高町と山川町などが加わる旧柳川藩領で福岡県山門郡を構成し、大牟田市や高田町などが同県三池郡を構成して今に至ったことによる。

つまり大まかに言えば、山門郡は柳川藩に、三池郡は三池藩に属した。だが、三池藩は江戸初期、柳川藩領の一部を分知し柳川藩の支藩として生まれた経緯もあって、ことばも含め、古来、相互の縁は深い。この二つの旧藩領に「柳川山門三池教育会」が成立し得たのもその証の一つである。

柳川市は平成の大合併で2005年市域を広げ、瀬高町は2007年、山川町や高田町と合併してみやま市瀬高町となる。町の人口は、2015年の時点で20,924人。

3. 本稿筆者の言語環境

冒頭でふれたように筆者は、誕生から18歳までを福岡県山門郡瀬高町で祖母と過ごした。父は、瑞鶴の零戦整備兵ならではの病を得て昭和30(西暦1955)年暮れに没した。父との言語生活は、祖母とのそれに比べれば、記憶が希薄である。明治24(西暦1891)年生れの祖母は、昭和42(西暦1967)年梅雨6月、享年75歳で逝った。

子どもは、ことばも価値観も二つながら親のものが刷り込まれ、一世代前の言葉と価値観を学んで成長するとの内田樹氏の指摘がある。これには異論の向きもあろうが、成人した子どもの発音や話し振りや思考などその親と瓜二つという驚異的事例も折に

ふれてよく見られ、あながち否定できぬ指摘かもしれぬ。筆者の場合はあてはまるような気がする。

となると筆者の場合、父の世代を飛び越えて、祖母の世代、つまり二世前、明治時代のことと価値観を受け継いだことになる。筆者の言語環境は、その手のものだったのかもしれない。事実、衆人がふだん口にしないような古い方言も祖母はよく口にしていた。筆者のことを「あんた、おたからまんちんたん」とか、上等品のことを「うん、そら、じょうとうはくらい(舶来)たん」などと。

4. 瀬高方言と柳川方言について筆者の寸言

瀬高方言は、筆者の全般的な印象では、柳川方言によく似ている。式台を有する大地主のお宅に柳川の御家中から嫁いでみえた奥様がおいでだった。廃藩置県から歳月が流れた戦前のことだが、このお方は上品な御家中ことばをお話しになり、一帯には稀な、丁寧な武家ことばだった。それを筆者が解することができたのは、祖母もそれに近い話者だったからだろう。むかしは、祖母の実家も、落魄したわが家も、武士の末裔だったようで、改正原戸籍には士族とある。

だが、これには余談がある。1988-89年オーストラリア国立大(ANU)の客員研究員だったとき、ANUのMenzies Libraryに、筆者未読の全3巻本、箱入りの渡辺村男著『旧柳川藩志』(柳川山門三池教育会編)という本があった。その上巻の図録の一つに「柳川藩屋敷図」があった。だがこの御家中に先祖の名はなく、期待は外れた。おそらく、地侍として明治を迎えたのであろう。瀬高の松延城の周囲には「樺島家・中山家・古賀家・金子家・蜂谷家の武家屋敷があったが維新後は生活も困窮し、皆この地を去られた」と松延城の解説(online as of June 1, 2017)にはある。金子家の場合は、掻き揚げ城(かきあげじろ)と思しい松延城の、「西二の丸」にある破れ屋に1967年まで、筆者が住んでいた。

このような経緯がある上は、方言が酷似するからとて柳川方言を論う資格は筆者にはない。よって本稿で扱う柳川方言は、2021年1月発表でonline上でも公開中の、九州大学大学院生松岡葵氏の論文「福岡県柳川市方言の文法解説」(以下、「柳川方言解説」)に採録された用例を、同氏の手承を得て、全面的に参照する。この論文は他の追隨を許さぬ光彩を放っており、光彩陸離たるものがある。¹ただし本稿では、方言のア

¹ そのごく1例だけを示せば「終助詞 *mee* は推量の意味を表し、動詞の否定接辞-*n* と義務接辞-*yan* にのみ後続する」と断じる炯眼と分析力(12.3.14=*mee*) [page102]はそうである。さらに、この勢いを

クセントやイントネーションは扱わない。

琉球方言(奄美語)と九州方言との類似はすでに指摘されていることだが、瀬高方言にもあらわれるので奄美語と対照しつつその一端についてもふれる。

5. 「柳川方言解説」に見る柳川方言と瀬高方言との違いは1点のみ

1点を除けば双方よく似ている。柳川方言は筆者には意味が取れる。微妙な違いはあるものの大差はない。違いは小異にとどまる。違いは1点のみという意味は、松岡氏の「柳川方言解説」に収録記載された柳川方言のみに限って、瀬高方言に照らして見た場合に、1点のみという意味である。

尊敬接辞には他に-mes などもあるが、ここで問題にする柳川方言での尊敬接辞-nahar と-ras を瀬高方言に照らした場合、違いは尋常一様ではない。

双方の懸隔がはなはだしいその1点とは、-ras に生じる極端な違いだ。「柳川方言解説」で筆者の目が止まったのは、尊敬を表す接辞として-nahar と-ras の二つが紹介されているその解説にあった。

片や-nahar の方は、瀬高方言でも柳川方言と寸分たがわぬ尊敬接辞であるから、何も問題はない。ところが、一方の-ras には問題がある。詳しく見てみよう。

尊敬を表す接辞としての-nahar と-ras について、「柳川方言解説」(page 118)には、次のような解説がある。

話者[柳川方言の情報提供者]の内省では、これら[-nahar と-ras]の接辞のうち敬意が高いのは-nahar の方である。-ras に関しては、尊敬という意味が薄く、(391)に示すように、年下の親族が主語の場合にもこの接辞を用いることが可能である。-ras 及びその同根と思われる形式が高い敬意を示さないのは、近隣方言でも同様のようである(福岡県 八女市方言; 藤 1970: 47, 福岡県大牟田市方言; 中島 2019, 佐賀県佐賀方言; 小野 1983: 108, 長崎 方言; 愛宕 1983: 138, 熊本県菊池郡大津町方言; 渡辺 2017, 熊本県葦北郡芦北町方言; 尾川 2018)。

ここに説明されている尊敬接辞-nahar は、瀬高方言でも柳川方言と寸分たがわぬ尊敬

総動員して作り上げた精緻な「表 15. 動詞のパラダイム(page 42)」を瞥見しても、これはまた明らかだ。

接辞である。問題は一方の-ras である。如上の説明では、柳川方言で-ras は、-naha を使った場合の尊敬の高さには及ばぬものの、年少もしくは目下の親族を主語としても使え、しかもある程度の敬意を含んだ尊敬接辞だという。だが、この説明の中に、「-ras が高い敬意を示さないのは、近隣方言でも同様のようである」という文言が含まれている点は気になる。

なぜなら、瀬高方言は確かに柳川近隣方言の一つだが、-ras の持つ意味が柳川やその近隣の方言とは大きく異なるからだ。ではどう違うか。

まるで違う。-ras に一切の敬意を含まないのが瀬高方言だ。本稿筆者には、その顕著な経験上の実例が2つある。まずは、高校生のむかし、伯父の八百屋のスイカ売りを手伝ったとき、八女方言で育った伯母にこの-ras を私に向けて使われた。なんと乱暴な物言いをする人かとムツとした記憶が鮮明にある。

2つめは、島原半島に妻の実家を訪ねたとき、妻、その実母そして私の3人が話をしている、義母は私の名前(given name)に「さん」づけをし-ras を使って「光茂さんな～しよらすと？」と妻に向かって、私の目の前でたずねた。とっさに I was not amused.(私はムツとした)。妻と2人きりになったとき、いくら自分の娘の夫だからとて敬語表現の片鱗も弁えぬ物言いは失礼千万であろう、と妻に強く抗議した。ところが妻に「あれは敬語表現ですよ」と反論され、懇々と諭された。

以上2つの事例でもお分かりと思うが、瀬高方言での-ras は尊敬表現ではないので-ras を使ったことが私に向けられると、今もって私には、ぞんざいな口のききかたをされたという反応が起こる。

-ras がなぜ、そういう心的反応を起こすのか。この原因が、単に個人的性癖に帰するものなら、語るに足りない。

個人の特異な心因反応とは別種の、方言上の言語学的な理由が何かあるはずだ。

もう一つ例をあげる。「柳川方言解説」に採録記載の例文では § 3.3.1 主語 の項 (64 a) [page 36]の例文において、例文の「主語が、-ras という尊敬接辞が示す敬意の対象となる」として次のような例文が「標準4段方式(下地 2020)」²で提示されている。

² 「柳川方言解説」における松岡氏の例文提示法は、「標準4段式(下地 2020)」が採用されている。それは、同論文中 page. 2 に記載された凡例によれば、以下の如くである。

<i>origa</i>	<i>yukitoni</i>	<i>haneta.</i>
ori-φ=ga	yukito=ni	hanas-ta
1-SG=NOM	ユキト=DAT	話す-PST

「私がユキトに話した。」

各段は、海外研究者にも内容理解が容易にできるよう配慮して、以下の基準で作成されている:

- (64) a. senseega nootoba miyorasita.
 sensee=ga nooto=ba mi-yor-ras-i-ta
 先生=NOM ノート=ACC 見る-PROG-HON-IFX-PST (下線筆者)
 「先生がノートをご覧になった。」

この表現は瀬高方言では、3行目と4行目が以下の如き意味となり、尊敬表現とはなり得ない。

- (64) c. senseega nootoba miyorasita.
 sensee=ga nooto=ba mi-yor-ras-i-ta
 先生=NOM ノート=ACC 見る-PROG-NHON-IFX-PST (下線筆者)
 「先生がノートを見ていた。」

以上のことから、本節の結論は、「柳川方言解説」中には(186a)[page 71]を含め尊敬接辞-rasについて複数の例文が採録されており、いずれも尊敬表現であるが、瀬高方言では-rasは尊敬接辞ではない、ということである。

6. 瀬高方言における接辞-rasの使用実態の信憑性の確認

以上述べた筆者の結論が、信憑性があるのか否か、確認を試みた。問い合わせた先は、高校時代以来の友人各位、SSさん、TS君、TN君そしてOS君の4名。

SSさんは福岡県旧山門郡三橋町(現柳川市三橋町)出身。旧瀬高町と旧柳川市の間にある三橋町は、柳川市に最も近い。近いどころか、西鉄柳川駅は、今も昔(平成の合併前)も、旧柳川市内にはなく、三橋町にある。そういう地理的に柳川方言に一番近いはずの三橋町で-rasは尊敬接辞ではないと言う、SSさんからの驚くべき証言を得た。-rasは尊敬接辞ではない、という筆者の信憑性は三橋町方言でも彼女によって担保された。

第1段目＝表層の音素表記で、方言調査協力者の生の音声を採録・記載したもの。

第2段目＝第1段目の形態素分析を行ない、それを表示したもの。

第3段目＝第2段目を「下地理則の研究室・方言グロスリスト」に則って松岡氏が付したグロス。

第4段目＝第1段目に示された生の音声を松岡氏が標準語に訳出したもの。

まだある。TN 君は、以前、筆者の家から 300m ほどの所に住んでいた。問い合わせると、如上の (64) c. のように、-ras は尊敬接辞ではなく「先生がノートを見ていた」という意味だ、と明言する返信を得た。指呼の距離で育った村内の友人にこう明言してもらうとなんとも心強い。

ちなみに、TN 君の父方の祖母は、私の家から嫁いだ人で、若い頃は習い事[勉強]のために片道 2 里余りを柳川城下まで毎日徒歩で往復した、というのが筆者の祖母の一つ話だった。小柄な女性だったが、眼光鋭く心身にみなぎる力があり、村人から一目も二目も置かれていた。彼女に筆者は「わりや、そりば、[pause] くさし(おまえはそれを [無言の間で(私に)の意] くれ)」と言われ、それを進呈したことがある。有無を言わせぬ物言いの、当時、もうすでに死語であったような古いことばを話す、ひとことで言うなら、古武士を女にしたようなお人だった。

TS 君は旧久留米藩領の筑後市に住いる。彼が住む筑後市の村落は、祖母が生まれ嫁いで来るまで住んだ瀬高町本郷という村の対岸にある。双方は矢部川を隔てて文字どおり一衣帯水の地で、幕藩時代から川の両岸は番所の目を盗んでそれ相応に交流があったもようだ、と TS 君は話してくれた。

そこで筆者の村内で祖母しか話さなかった表現を聞いてもらうと、双方同じ瓜二つの表現がいくつも存在した。だが、この一事をもって瀬高方言と筑後市方言が同じことには断じてならないのは勿論である。

OS 君は大学卒業後、国会議事堂そばに住んでいたが今はさいたま市に住む。英語学習では Use it or lose it. と言うが、彼の場合、瀬高方言は、久しく使う機会がなくて、思い出すのにさえ苦労したとみえる。OS 君によると、義務教育の折に、方言を使わず標準語を使えと教育されたという。加えて、瀬高を長く離れているせいも、-ras が尊敬接辞であるか否かも含めて、一体に瀬高方言の確たる証言者たるをはばかる趣が感じられたので、その気持を尊重することにした。

以上のことから、瀬高方言は、筆者が知り得る地域内においては-ras は尊敬接辞ではない。さらに、瀬高町の隣町三橋町においても同様のことが言える、と結論づけて差し支えない。

ただ、これが瀬高町と三橋町の全域に及ぶかどうかは、今後の調査に待つほかない。

7. 柳川方言と大同小異の瀬高方言およびその解説

本節では、「柳川方言解説」の解説に、あるいは「標準4段方式(下地 2020)」で紹介される例文に、小異が含まれる場合、適宜ぬき出して★で引用する。これを受け◆で瀬高方言の場合を解説ないしは紹介をする。例えば、以下の通り。

★ 4.1.1.1. 1人称 の冒頭(page35)に「本稿が調査対象としている話者の中には ori は男女問わず用いられ watasi は女性にのみ用いられている」とある。(下線筆者)

◆現在は自称の ori は男性のみが使う。団塊の世代の1世代前あるいは同世代では orige (私の家)という形でなら女性も使っていたと筆者は記憶している。なお、TN君はその返信で、筆者も知る村内(むらうち)の3人の女性の実名を挙げて、団塊の世代の2世代前、つまり、団塊の世代の祖母たちが、ori を自称として使っていた、と証言してくれた。

では彼自身の祖母はどうだったか。「私の祖母も使っていたような気がする」という記憶の明暗を分けがたい回答だった。ここに彼の性格がよく出ている。正直でウソがない。なぜこのような回答だったかは筆者には説明ができる。

本稿44頁で筆者は、「わりや、そりば、[pause] くさし(おまえは、それを、[無言]、くれ)」とTN君の祖母に言われた、と記した。この[ポーズ]ないし間(ま)の部分は、言われなくても誰にも分かる、自称「オリ」の目的格が入ることが、この頃になるとTN君のお祖母さんは、方言を含む時代の変化に敏感で「わりや、そりば、[ore-ni]、くさし」などとは、TN君の幼少の砌とは違って、最早おっしゃらなくなりつつあったとみられる。それゆえ、明確な使用痕跡がおぼろげな影でしか残らなくなり、「私の祖母も使っていたような気がする」というTN君の回答となって現れ出たのだろう。

ちなみに、筆者の祖母(明治24年生れ)は、自称の ori を使ったことがない。他方、自称の ori を使った痕跡をTN君の記憶に残すお祖母さんは、明治8年8月の生れで、筆者の祖母とは一回り以上の年齢差がある。従って筆者の祖母は瀬高に於いて「自称 ori を使う女性の絶滅期」以後に育ったと考えられる。その証拠に私の祖母の口から自称の ori が発されたことは唯の一度もない。

以上のほかに本節では、柳川方言と瀬高方言の小さな違いを、次のような形式を採用して紹介する。

★ 4.1.1.1 1 人称 の冒頭(page35)に「1 人称代名詞には ori と watasi, konta がある」(下線筆者)

(102) kontano kodomowa yuu benkyoo suru.

konta=no kodomo=wa yo-u benkyoo su-ru

1-SG=GEN 子ども=TOP よい-ADV LZ 勉強する-NPST

「私の子どもはよく勉強する。」

◆瀬高方言には konta はない。現今の瀬高方言で言うならば「(男性は)おりげん / おりが / (男女を問わず) うちん / うちの / 私の / (女性は)あたしの / 私の子ども」ぐらいの言い回しになる。

したがって今日、瀬高方言話者に向かって konta を使っても通じはしない。

★ (60) 取り立て助詞 *bakkai*

sogen terebi bakkai mite yokakai.

sogen terebi bakkai mi-te yo-ka=kai

そんなに テレビ RPT 見る SEQ よい NPST=Q

「そんなにテレビばかり見ていいの?」

◆瀬高方言では、取り立て助詞 *bakkai* は、標準語と同じ *bakkari* を使う。だが、柳川式発音でも筆者には通じる。瀬高方言話者にも通じるはずだ。小異の違いだから。

★ 5.3.6.4 並列接辞-*tai*

並列接辞-*tai* 「～したり」が子音語幹に接続する場合、非拡張語幹に接続する。母音語幹に接続する場合、i 語幹、e 語幹ならば非拡張語幹に、e/u 語幹ならば非拡張 e 語幹に接続する。変格活用語幹に接続する場合、「来る」は *ki*-に、「する」は *si*-に接続する。 [pages 49-50]

表 28. 並列接辞-tai

子音語幹	//hasir-tai//→/hasittai/	「走ったり」
i 語幹	//mi-tai//→/mitai/	「見たり」
母音語幹	e 語幹 //de-tai//→/detai/	「出たり」
	e/u 語幹 //kake-tai//→/kaketai/	「かけたり」
変格活用語幹	//ki-tai//→/kitai/	「来たり」
	//si-tai//→/sitai/	「したり」

◆柳川方言のこの並列接辞-tai は、瀬高方言では、標準語とまったく同じ並列接辞-tari という形を用いる。だが、瀬高方言話者ならこの柳川方言を聞いて脈略から、ほぼ 100%理解できるであろう。その理由は、取り立て助詞 *bakkai* に見た通り。

★ 7.3 屈折形容詞の名詞化 接辞-*sa* は、屈折形容詞語基を名詞化する。

[page 64]

- (158) *baa essa.*
baa esu-sa
 まあ 怖い-NMLZ
 「まあ、怖いこと!」

◆瀬高方言の場合、高度成長期前の高齢者は使っていたが、筆者の世代なら聞いて分かる。だが使う話者はごく稀で、代わりに“*baa esuka*”と形容詞を名詞化せずに使う話者が圧倒的多数を占めるだろう。

★ 8.2 副詞 「指示語や疑問語と関連の無い副詞には、*basaraka* 『とても』、*gyan* 『とても』、*citto/cyotto* 『少し』、*iccyon* 『少しも』、*issyookemee* 『一生懸命』、*mada* 『まだ』、*honnakote* 『本当に』がある。以下に例を示す」副詞の一つに *gyan* 「とても」が、以下のように挙げられている。[page 66]

- (167) *gyan sugoka.*
gyan sugo-ka
 とても すごい--NPST
 「とてもすごい。」

◆瀬高方言話者には、*gyan* の意味が取れぬ。副詞であるかどうかさえ不明で、意味も不明。だが、*gyan* を *basaro* または *basaraka* あるいは *honnakote* に言い換えればその意味が取れる。

以上、柳川方言との瀬高方言の違いを挙げてみたが、ここで接辞-*ras* をめぐって尊敬接辞か非尊敬接辞かについて議論したことを除けば、この二つの方言には大差がない、つまり、大同小異の事例が甚だ多いことがお分かりいただけたと思う。

なお、ここで参照した「柳川方言解説」では「雨戸を繰る」や「菜花」など筆者が知らぬ表現もあったが、瀬高方言とばかり思い込んでいたことが広辞苑にも出ている場合がみられた。方言で有る無しに拘らず、すべて採録しておくべきだった。

たとえば「おめく」や「踏み継ぎ」などは長年、方言だと信じ込んでいて、本稿ではふれなかった。ほかにも、現に瀬高方言の表現集を認めていて、方言と思っていたものが標準語であることが存外、多かった。おそらくこの現象は全国各地の方言についても当てはまる事例だろう。

これには理由がある。丸谷オ一氏が明言しているように「方言は古語、古義を残している場合が多い」³からだ。それ故にこそ、標準語であるなしに拘らず、私たちの方言も命脈を保ち、長いあいだ人口に膾炙して、今日に至っているのであろう。

以上、柳川方言を瀬高方言に照らして明確化してみても言えることは、この二つの方言は、大同小異の表現が甚だ多いということだ。したがって、双方は親密な兄弟の関係にあると言って差しつかえは、まったくない。これが本節の結論である。

8. 瀬高方言の表現集とその簡易解説

瀬高方言の一端を知ってもらうために、松岡葵氏のひそみに倣い、本節に瀬高方言の表現集を付す。熟ら思出すままに項目を立てたが、18年間顔を突き合わせて生活した祖母との言語生活が基礎になっており、現今の瀬高方言話者には隔世の感があるかもしれないが、何の潤色も施してはいない。

TN 君の祖母同様、筆者の祖母に本稿に示すが如き野卑なことば使いはなく、もしある場合は筆者が長じるにつれ他から習い覚えた表現である。提示方法は、柳川方言との比較がしやすいよう、松岡氏の方法に少し近づけた。

³ 丸谷オ一『忠臣蔵とは何か』（講談社文芸文庫, 1988), p. 204.

A — a

abakan adverb. たくさん。yomiseno abakan detoru. 夜店がたくさん出ている。

◆**abakan** は、奄美諸島徳之島伊仙町でも話されているのを KBC テレビで知る。

ado noun. (足や靴の)踵。Category:体の部位。

kucunoadoba fundesaruicya nan. 靴の踵を踏んで歩いてはならぬ。

amacyanbu noun. (液体の)甘茶。Category:祭礼の直会。

◆4月8日の灌仏会に用いる「甘茶のおぶ(甘茶の湯)」の訛か。

amakkocu noun. (世の中をなめたような)甘っちょろいこと。調子のいいこと。

amakkocu bakkari yuuna. 調子のいいことばかり言うな。

anaccuan noun. あなた様。Category:人物呼称(呼びかけ)。

anamatakusare noun. 手足の付け根や体の凹みの腐れ。Category:体の部位。

yoo arotokanto anamatakusareninaruban.

(手足の付け根や体の凹みを)よく洗っておかないと汚れで腐れてしまうよ。

anokusa / anokusanmo interjection. あのね(な)/あのですね。

◆前者は友人や目下に対して後者は目上に対して、呼びかけに用いる。

ansyan noun. 兄さん。Category:人物呼称。

◆呼びかけにも使う。anizya(兄者)が語源か。

anossan noun. あの人。Category:人物呼称。

◆女性を指す場合もある。

anossanna arakaa. あの方は荒っばい。

asekuru / asekurimawasu verb. (物を探すために)散らかす。かきまわす。

◆庭などで鶏が餌をあさりまわるときにも使う。

aetoru aspect. 落ちている。kurino abakan aetoru. 栗がたくさん落ちている。

◆栗が ayuru(落ちる)動作が終了して落ちた状態で目の前にある、の意。

B — b

-
- ba** accusative case of particle. ～を。
 ◆これは-woba の wo の消失に非ず。元々-ba が古形。
- baa** interjection. うわー。 **baa, kora tamagatta.** うわー、これは、驚いた。
- bai** sentence-final particle. ～だよ。～だからね。～なのだよ。
-baiwa amamigonimo attobai. 「ばい」は奄美語にもあるんだからね。
 ◆まさに「文末にあつて軽く念をおすような詠嘆を表す(日本国語大辞典)」終助詞で、奄美北部方言と瀬高方言は同じ意味内容と用法を共有している。
- bakaso** noun. ツルアズキ。 Category:豆(食用).
 ◆ちょっと見では、ほぼ小豆に似るが、小豆ほどの人気はない。
- basi** postpositional word. にでも。
yososanbasi hattetacuyaro. 余所にでも行ってしまったのだろう。
 ◆「(係助詞ハに強意の間投詞シが付いて、語頭が濁音化したもの)平安末期より用いられた。江戸時代にはあまり使われなくなり、現在、佐賀・鹿児島方言に残っている」(広辞苑)とあるが、瀬高方言にもある。
- bataguruu** verb. (痛みや苦しみに)七転八倒する。のたうちまわる。
- batten** conjunction. だけれども / だけど。
sagasitabatten micukaranyatta. 探したが見つからなかった。
 ◆「～ばとて」の訛。ほかに、**battenga / battengara / batte** とも言う。
- bayo** sentence-final particle. ～だよ。～するのだけど。
odden hanamiwa surubayo. 俺でも花見はするのだよ。
- benputa** noun. ほっぺた。頬。 Category:体の部位。
benputaba neezumareta 頬をつねられた。
- bobura** noun. 南瓜(カボチャ)。 Category:野菜。
- buttangaki / zyukusigaki.** 熟柿。 Category:果物。
 ◆「熟柿(じゅくし)柿(がき)」とは同語反復だが、方言ではこう言った。

C — c

cu noun. (出血後にできる) 硬い皮。瘡蓋(かさぶた)。Category:体の部位。

kizukaracinodete cunodeketa. 傷から血が出て硬い皮ができた。

cugane / dugane noun. モクズガニ。川蟹。Category:川魚(食用)。

◆川蟹の甲羅の形状を cu に見立てたのかもしれない。海の蟹はただガネと言う。

cukkuyakasu verb. こわす。破壊する

◆cukkuyakasu は cukkuyasu とも言う。

cumikinohakoba cukkuyakasita. 積木の箱をこわした。

cumagre noun. 鳳仙花(ホウセンカ)。Category:園芸植物。

cumayuru verb. 摘み取る。Category:農作業。

kyuurino teppenno meba cumayuru. 胡瓜の先端の芽を摘み取る。

D — d

dadabasiri noun. ひた走り。Category:人間の所作。

dadabasiride nigetekita. ひた走りに走って逃げてきた。

◆dadabasiride は dadabaside とも。この手の促音便化は九州方言に顕著。

daragame noun. (完熟肥料化して畑などに撒くために)人糞を溜めておく大甕。

Category:農作業用。

◆「だら」とは「人糞肥料」のこと(広辞苑)。

damakuraku verb. だます。

ayacua hitoba damakuraku ken. あいつあ人をだましてしまうから。

dokedakka adjective. (胃にもたれる)しつこい味だ。Category:味覚。

konryoorya dokedakka. この料理は濃厚だ。

donkonsyonnaika verbal phrase. Category:慨嘆。

どうにもこうにもならない。どうにもこうにもしょうがない。

dooduki noun. 胴突(どうづき)。Category:建築用の道具。

◆昔の家造りに必須の地盤を突き固める作業道具ないしその仕事。

E — e

eegancyo noun. エイ。アカエイ。Category:魚介類(食用).

eekurau verb. 酔っぱらう。

◆eekurai は酔っぱらい。

eekuroote netesimootagena. 酔っぱらって寝てしまったそうだ。

emasuru verb. 怪我をする。

son kusakarigamade emasunna. その草刈り鎌で怪我するな。

F — f

funoyaki noun. (パンケーキ風のおやつ。Category:おやつ。

◆いわゆる「粉もの」で小麦粉に砂糖と卵を水で溶きフライパンに油を引いて焼いたおやつ。奄美大島空港にほど近い店によく似たものがあり、「ふなやき」という商品名で売っていた。

futattamago noun. (卵1個の中に)卵黄が2つある卵。Category:鶏卵。

◆futacutamago は futattamago とよく促音便化して用いられる。

futokara meeota verbal phrase. ひどい目に会った。

kiseicyuuni taifuude kisyano tomatte futokara meeota.

帰省中に台風で車が止まって大変な目に会った。

fuucurakezuri noun. 長柄の先に半円形の鋤を付けた道具。Category:農具。

◆畑の畝(うね)に生える雑草を削り取るための、昔あった農業用具。

fuyunaru verb. 億劫になる。

dekakuttoga fuyunatta. でかけるのが億劫になった。

fuzorokka adjective. むさくるしい。きたならしい。

anhita agen fuzorokka kakkoobasite-dooka.

あの人はあんな見苦しい格好をしてどうだろ、なんとまあ。

G — g

ga accusative case of particle. (目的格)格助詞の「が」。

omaega sukida. おまえが好きだ。

- ◆東日本大震災で大津波が三陸大船渡に襲来したとき、彼地の男性が「うわー、堤防が超えてしまった。」と主語なしのことばを何度も絶叫した。この「が」は上記の二例とも目的格の格助詞であり、主格ではない。大船渡の場合、文脈での主語は「津波」だが、いっさい発音されぬままだった。

gamadasimon noun. 働き者。Category:人物呼称。

anta honnakote gamadasimontai. あなたはほんとうに働き者だよ。

- ◆**anta-wa** でなく **anta** と主格の助詞「は」が欠落可能。標準語でも同じ。

gameni noun. 筑前煮。Category:料理名。

- ◆広辞苑(第六版)で「がめ煮」をひくと「筑前煮に同じ」とある。日本国語大辞典(初版)に「がめ煮」の記載はない。日本国語大辞典は、方言なら方言と明記しているはずだが、といずれか選択に迷う場合は、以下、筆者の経験則を重視して判定する。よって「がめ煮」は方言。

gassyoku noun. 食合わせ(くいあわせ)。Category:食の禁忌。

- ◆世に「ウナギと梅干は食合わせが悪い」と言うが、祖母が「食合わせ」という言葉を使うのは皆無で「がっしょく」と言った。筆者は勝手に漢字を当て「合食」として記憶していたが、標準語でないことを本稿執筆中に知る。

gistonsen set phrase 全く動かない。 **uwa gistonsen.** うわ、びくともしない。

- ◆重い物を動かしたり持ち上げようとしてもびくともしない時のひと言。

gittanko battanko noun. シーソー。シーソー運動の擬音語。Category:幼児語。

gittanko battanko syuuka. シーソーで遊ぼうか。

goccuan noun. ごちそうさん。Category:挨拶語。

- ◆相撲取の「ごっつあんです」に似る。

gokkaburi noun. ゴキブリ。Category:無脊椎動物。

- ◆「御器(ごき)嚙(かぶ)りの転」(広辞苑)と説明される古義をよくとどめ、しかも、より忠実に伝えた方言といえよう。

gokkinaka adjective. どでかい。とても大きな。Category:大きさ表現。

gokkinaka taiwandozyooba totta. どでかい雷魚を捕った。

gomagaki noun. (微小な黒胡麻のような斑点が果肉に詰まった形状の)甘柿。

Category:果物.

gonbo noun. 牛蒡。Category:根菜.

◆ゴボウではなくゴンボと言う。

gorogorosan noun. 雷。雷鳴。Category:幼児語.

gorogorosanni hesotoraruzzo. 雷様にヘソを取られるぞ。

gote noun. 背中。Category:体の部位. goten kaika. 背中がかゆい。

gurarisuru verb. 落胆する。気落ちする。気が萎える。Category:感情表現.

agenka iwarekatasutto gurarisuru. あんな言われ方をすると気が萎える。

gusuto adverb. とても。うんと。非常に。Category:副詞.

socchinoooga gusuto yoka. そっちの方がはるかに良い。

guzeru verb. (幼児などが親などに)むずかる。すねてさからう。

konkowa guzette guzette syonnaka.

この子はじれて泣いて手のほどこしようがない。

H — h

haiyo verb. (～なさって)下さいませ。soosite haiyo. そうなさって下さいませ。

◆渡辺村男著柳川山門三池教育会編『旧柳川藩志全3巻』(昭和32年3月5日発行)の中巻第17章第4節「言語」pp. 234-240を参考に、haiyoの変遷を考えると sayoo hairyoo tamawari masureba. (左様拝領賜りますれば[有難き幸せに存知まする])の「拝領」が hairyoo を経て haiyo になったのだろう。つまり haiyo は、主君より知行を拝領する等の儀式で言上する尊敬度の高さに源があるので、旧柳川藩領の武家ことばの精華として最高の光彩を放つ落ち着いた華やかさがあり、柳川・瀬高方言の精髓とみなしてもよからう。

◆[但書とお断り] 因みに、第4節 pp. 237-40で渡辺氏が1項目1行説明で紹介した柳川方言全112項目中、38項目が意味不明。筆者が知る瀬高方言の運用や語彙では歯が立たなかった。筆者の1世代前ですら、ほとんどが鬼籍に入ってしまった今では、誰に問えばいいのだろうか。

harakaku verb. 立腹する。怒る。Category:感情表現.

anossanna harakaite kaettesimoota. あの人は腹を立てて帰ってしまった。

hasinna verval phrase. 走るな。Category:呼びかけ.

hasiriguccyo noun. 徒競走。Category:運動. hasiriguccyo sui. かけっこしよう。

hatakeuci noun. 畑の耕し。Category:農作業.

kyuuwa hatakeucisita. 今日は畑を耕した。

hiyokogusa noun. ハコベ。Category:春の七草の一つ.

hiyokogusaba cunda. ハコベを摘んだ。

hoito noun. 乞食。Category:人物呼称.

hongengyo noun. どんど焼。Category:正月前の年末行事.

◆孟宗竹と藁を円錐状に高々と組み上げ火を放つ。雌竹の先に正月用の餅を付けて焼きこれを食すと来年は無病息災の1年になるという師走30日夜の行事。

honyoru verb. 骨折り仕事をする。Category:仕事(労働).

kon sigotonya honyotta. この仕事には骨が折れた。

horihosi noun. 堀(クレーク)の水抜きと掃除。Category:農作業.

◆早春、水をぬき溜まった泥を浚い堀の機能を保つ作業。冬眠中の魚も獲れる。
今は圃場整備と田圃への農業用水設備が整い、かような光景は見られない。

honyotte averb. やっと。やっとのことで。

honyotte zenbu sitesimoota. やっとのことで全部してしまった。

hooze noun. カワニナ。Category:淡水産の巻貝.

mukasya hoozeba tabeyotta. 昔はカワニナを食べていた。

◆カワニナは蛭の幼虫の餌になる。日本住血吸虫の中間宿主の宮入貝とは別種。

huuzo noun. 蓮華草(レンゲソウ)。Category:田の緑肥.

huuzowa tannakano koyasininaru. レンゲは田圃の肥料になる。

huzu noun. 蓬(ヨモギ)。Category:野草(食用)

◆蓬餅を作る大事な材料。

hyookoidake noun. 火吹き竹。Category:煮炊き用の竈(かまど)用具.

◆火起こしの必需品。

hyuugemon noun. ひょうきん者。Category:人物呼称.

◆剽軽者の訛りか。

hyuhyuugattan noun. 肩車。Category:人間の動作(所作)。

hyuhyuugattan siteyarooka. 肩車してやろうか。

| — i

iccyan adverb. いちばん。最も。iccyan yokatta. いちばん良かった。

iccyon adverb. 少しも。ちっとも。Category:必ず後ろに否定表現を従える副詞。

iccyon nitoranne. 少しも似ていないね。

◆南九州市の婦人 70 歳もこの方言を使用(朝日新聞 2019 年 7 月 2 日付)。

iccyan-koono-see verbal signal. いちに一のさん。Category:共同作業合図。

iccyonnaka adjective. まったく同じ。

koreto arewa iccyonnaka. これとあれは全く同じ。

◆iccyonnaka=[cigaiga] iccyon naka. が約まった表現であろう。

iccyoku verb. 置き去りにする。そのままにしておく。うちすてる。

dadden asinohayakaken iccyokareta. みな足が早いのでおいてきぼりをくった。

madowa akete iccyokoka. 窓は明けたままにしておこうか。

ikuru verb. (食または酒が)すすむ。

kon okazude gohanno ikuru.このおかげでご飯がすすむ。

imozzyo noun. 妹さん。Category:人物呼称。

anohitoniwa imozzyono orassyaru. あの人には妹さんがおいでだ。

inma adverb. その内。やがて。いずれ。

ima wakarancya inma wakaruru. 今わからなくても、いずれ分かる。

itakkuru verb. 行ってくる。

cyotto zitensyayani itakkuru ken. ちょっと自転車屋に行ってくるから。

itamaguri noun. 胡坐(あぐら)。Category:人間の動作(所作)。

seizanodeken ken itamaguri sasete kudahare.

正坐ができないのであぐらをかかせて下さい。

iyoru / iiyoru verb. 言っている。

nannokocuba iyottokai. 何のことを言っているんだい。

K — k

kaccyo noun. 白腹(シロハラ). Category:野鳥.

◆高度成長期初頭には釣針にミミズを付けこの鳥を釣る人がいた。

-kai sentence-final particle. ~なのかい/かな。~であるのかい。

nannokocu iyotto-kai. 何のこと言っているんだい。

◆この-kai は「疑問または疑いの終助詞」で瀬高にも奄美北部方言にも現存。

kado noun. 屋敷内。庭。

kado hongengyo. (正月7日早朝の屋敷内での) どんど焼き。

◆正月飾りを燃やし、餅を焼いて食べ、藁灰は火鉢の古い灰と入れ替える。

kamacukadonko noun. シマドジョウ。Category:川魚(食用)。

◆豪州 NSW 州 Eden の motel では pet で飼われ、weather loach だと教わった。

kasiuri noun. (黄色い)真桑瓜。Category: (庶民感覚で)果物。

◆高度成長期には白色種も登場。

keedemiru verb. (臭いを)嗅いでみる。

son nioiba keedemiro. その臭いを嗅いでみろ。

kibiru verb. 結わえる。

sono waraba kibitekure. その藁を束ねてくれ。

kinnasi adverb. 際限なしに。

sakeba kinnasi nomu. 酒を際限なく飲む。

kobu noun. 蜘蛛(クモ)。

◆蜘蛛の巣は、「コブナエ」と言う。夜間に出てくる蜘蛛は「ヨロコブ」と言っ
て縁起が良いとして殺さなかった。

kockikee verbal phrase. こっち来い。

◆指示代名詞コチの促音化+「来る」の命令形「ケー」。

kodumu verb. 積む。積み上げる。

kamagiwa kokoni kodundekure.

かまぎ[筥で作った米・麦を入れる俵]はここに積んでくれ。

◆kodumu = 接頭辞 ko-(小)+動詞 cumu(積む)。

koozyoo noun. 口ごたえ。

koozyooyuuna koozyoowo. 口答えするな、口答えを。

koogegasu noun. 鶺鴒(かささぎ)。Category:野鳥。

- ◆白まじりで漆黒の鳥に似る姿からカラス扱いされ、秀吉朝鮮出兵時に半島より持ち帰ったのでその名がついた「高麗鳥」が訛ったもの。キャンベラの **magpie** と姿かたちはそっくりだが、営巣期に人を襲うような獍猛性はない。

kosuka adjective. ずるい。ずるくて抜け目がない。

kosukakocua sunna. 狡いことはするな。

- ◆文語「こすし」が **kosu+ku+ar**(こすくある)と活用されて「こすか」に転じたもの。このように語尾に接辞-ka をともなう形容詞は九州一円の方言に多い。たとえば、酢っぱか(酢いか)、甘か、塩辛か、よ(良)か、悪か等。

kukeru verb. 間引きする。Category:農作業。

daikonba kuketa. 大根を間引きした。

kumizi noun. 水汲み場。

- ◆近所に幅1間半ほどの魚釣りもできる用水路があり、洗濯やコメ研ぎや食器洗いなどに人々は使っていた。道から1メートルほど降りると水が汲める。その場所を祖母は「クミジ」と呼んだ。方言調査で沖縄県の東村や名護市に行くと「水(ミズ)」が「ムィズィ」と発音され、この独特の発音で、祖母が使っていたこの呼称の源は「クムィズィ」だと知る。

因みに久米島では「水 **midzi midziga nagariton** (水 水が流れている)」との報告がある(仲原穰「久米島真謝方言の名詞のアクセント」 in 『琉球の方言』30号[法政大学沖縄文化研究所, [2006年3月31日発行] p. 177.)。

kurasuru verb. なぐる。ぶんなぐる。

oocyakuyuuto kurasuzzo. 横着言うと殴るぞ。

- ◆「くらわする」が転じて「くらする」となった(日本国語大辞典)という。

kuzzoko noun. 舌平目(シタビラメ)。Category:海魚(食用)。

- ◆魚体の形が「靴底」に似ることからこの名がある。英国でもこの魚を **sole**(靴底)と言い、ドゥヴァー海峡で捕れる舌平目は **Dover sole** として有名な名物料理。筆者には「名物に旨いものなし」の類いだったが。

M — m

madou verb. 弁償する。

noonarakakeetara madoeyo. 紛失したら弁償しろよ。

manmansyan-a set phrase. Category:幼児に拝仏を促す時の文句。

hai manmansyan-a site. はい、マンマンシャン-ア、しなさい。

mapposi adverb. 真正面に。

kokkara kiyomizuyamano okannonsanna mapposi miyuru.

ここから清水山のお観音さんは真っ正面に見える。

mara noun. 全裸。Category:体の部位. marade oyogu. 全裸で泳ぐ。

◆マラは「魔羅」が語源。高度成長期前の男性用ズボンには、みなファスナーはなく「マラボタン」がついていた。

maru verb. 小便をする。Category:人の排泄行為。

syonben mattekuru. 小便をしってくる。

◆『古事記』にも出てくる「マル」は「小便をする、大便をする」の意で使われる(大野晋氏)とあるが、瀬高方言では小便の方に専ら使う傾向にある。

mee sentence-final particle. だろう。であろう。

sogennya iwanmee. そうは言わないだろう。

◆直接法否定接辞-n に後続し、推量の意を表す。

meeru verb. (神仏などに)もうでる。参る。

tenjinsanni mettekita. 天神様に参ってきた。

mekkaran verb. 見えない。見当たらない。

◆micukaran は標準語に同じ。

memore noun. (目にできる)麦粒腫。ものもらい。Category:できもの。

mes an auxiliary verb used to show respect. (～して)おいでになる/いらっしゃる/おられる。

syoogacuwa zikkani kaerimesuka. 正月は実家にお帰りになりますか。

minnosu / miminosu noun. 耳の穴。Category:体の部位。

◆mingo は耳垢。

minnosu kappozitte yookike. 耳の穴をほじくってよく聞け。

mirogge noun. 赤貝(アカガイ)。Category:貝類。

◆-ge は「貝」の意。(例)アサリゲ=アサリ貝。

mogurauci noun. モグラ打ち。Category:正月行事。

◆モグラを撃退する正月 14 日早朝の行事。女竹の先端に土俵だわら状に藁を巻き付け縛ったもので庭や畑の小道を叩いて音を立てながら一回りする、「モグラ打ちのじゅーよっか旦那さんのおやしきにゃー」と歌いながら。

mooga noun. 馬鍬(まぐわ)。Category:農具名。

◆牛や馬に牽引させて田圃の荒起こしや代掻きをさせる農具。

mugau verb. 意地悪する。

sogen hitoba mugauna. そんなに人の嫌がる意地悪はするな。

muzogaru verb. かわいがる。

muzogarete sodatta. 可愛がられて育った。

◆Cf. 無慙(むぞう) = かわいらしいこと(広辞苑)。

muzooge interjection. かわいそうに。

◆父の通夜で筆者の耳に入った。誰のことか分かった。

N — n

nagi noun. ホテイアオイ(布袋葵)。Category:浮き草。

nagide ikadaba cukutte asoboi. 布袋葵で筏を作って遊ぼうよ。

◆『万葉集』巻 16 に詠まれているという「ナギ(水葱)」とは別種の南米原産の浮き草。毎年夏になるとクリーク一面をこの植物が覆っていたが今ではそのクリーク自体がない。

nakebesu noun. 泣き虫。Category:人物呼称。

nan verb+negative auxiliary verb. ならぬ。

sogenkakocu sicya nan. そんなこととしてはならぬ。

◆なら(動詞ナルの未然形)+ぬ(否定の助動詞)=ならぬ。この「ナラヌ」が約まって「ナン」となったもの(松本泰丈氏)。

nankakuru verb. 持たせ掛ける。立てかける。

hasigoba kabeni nankakuru. ハシゴを壁に立てかける。

- nankakaru** verb. 寄りかかる。もたれかかる。
 sokoni nankakaccya nan. そこにもたれかかってはけない。
- nankomu** verb. 投げ入れる。投げ込む。
 kawannake nankomareta. 川(の中)に投げ込まれた。
- nanton-kanton / nankiron-kankiron / nanno-kanno** compound
 word. 何やかや。とやかく。いろいろ。
 nanno-kanno monkubayuu. 何やかや文句を言う。
- nekonpinpin** noun. ナズナ。Category:春の七草。
 nekonpinpinga nanakusano-hitocccya siranyatta.
 ナズナが七草の一つとは知らなかった。
- nedokasu** verb. (体などを)こわす。
 sogen koncumetara karadaba nedokasuban.
 そんなに根を詰めたら体をこわすよ。
- neeharigonbe** noun. スベリヒユ。Category:雑草。
 zassoono neeharigonbega taberaruccya siranzatta.
 雑草のスベリヒユが食べられるとは知らなかった。
- neezumu** verb. つねる。
 nemukatokya futomomono-cukeneba neezumu.
 眠い時は太腿の付け根をつねる。
- nemaru** verb. (ご飯などが)くさる。腐敗する。
 kongohanna nemattoru. このご飯は腐って(食べられなくなって)いる。
- nnara** interjection. それじゃあ。nnara ikken. それじゃあ、行くから。
- noonaru** verb. 尽きる。無くなる。消滅する。紛失する。
 zitchensyano kagino noonatta. 自転車の鍵がなくなった。
- nosan** compound word. じっと我慢できない。たまらない。たえられない。
 cyoddokoni ikogocusite nosan. 便所に行きたくてたまらない。
- nomogotaru** verbal phrase. 飲みたい。
 nodonkawaita. ocya nomogotaru. のどが渴いた。お茶飲みたい。
- nousiro / noosiro** noun. 苗代(なわしろ)。Category:早苗の育苗用地(農業用地)。

○ — ○

obaikē noun. 晒し鯨。Category:海産物(食品)。

kono obaikewa ikurakanmo. この晒し鯨はいくらですか。

obu noun. 白湯(さゆ)。kusuriwa obude nonda. 薬は白湯で飲んだ。

odontaci noun. 私たち。我々。俺たち。Category:人物呼称。

ogoccu noun. ご馳走。kora ogoccuya. これはご馳走だ。

okaccuan noun. (他家の)おかみさん。奥さん。Category:人物呼称。

asukon ucinya okaccuanno korasyatta gena.

あその家にはおかみさんが来られたそうだ。

◆gena は伝聞の助動詞。

okkan noun. おっかん。Category:人物呼称。

◆これは「母さん」や「おっかさん」と較べれば、尊敬や丁寧さの度合いが一段と低い。適切な標準語に置き換えがたい(標準語が見当たらない)。

okumozī noun. (三池高菜を漬けた)漬物。お香漬け。Category:女房言葉。

◆ほかに「ひもじか」や「はもじ」といった女房言葉を祖母はつかった。「は文字 = (方言)こしまき。(福岡県山門郡)」(日本国語大辞典)、とあるのが正に祖母のこの「はもじ」。

omosunomo verbal phrase. 湿気が強くて蒸し暑いですね。Category:挨拶。

◆接辞-nomo は、渡辺村男氏が記す「のうもし = 問ひ掛ける言葉」の「のうもし」が約まったもの。

ongo noun. 娘子。Category:人物呼称。

◆娘の頃、祖母はこう呼ばれて義父に可愛がられたという。

oobangenaka adjective. 大雑把な。おおまかな。粗雑な。

ookahooga-noogaree set phrase. 多い方が[鬼]逃がれ。Category:鬼の選定時の掛け声。

◆円陣を作り、このかけ声と同時に掌を上か下かにして円中央に出す。多数派は放免され、残る少数派が同じやり方を繰り返し、小数人になったらじゃん拳で1人に絞る鬼決め方法の一つがこれ。

osyoru verb. 折る。

son takewa osyorunayo. その竹は折るなよ。

osette noun. (子ども主体の天神様祭りで賽銭をあげた参拝客にわたす)炒り豆やお菓子の類。

otoddon noun. (他家の)弟さん。Category:人物呼称。

asukon otoddonna yomesan morawassyatta gena.

あそこの弟さんは嫁さんをもらったという話だよ。

otoccuhan noun. (自家または他家の)お父さん。父親。Category:人物呼称。

ozodoru aspect. 目を覚ましている。起きています。

kodomotacya moo ozodorukane.

子どもたちはもう目を覚ましているかな。

◆**ozomu** は「目を覚ます」という意味の verb.

P — p

paci noun. 面子(めんこ)。Category:子供の遊び道具。

◆武者絵などが描かれた直径 5cm ほどの自分の丸厚紙(パチ)を、地面に置かれた相手のパチのすぐ脇の地面に叩きつける。その風圧や衝撃で相手のパチが裏返ったらそれがもらえる、というのが遊びのごく一例。

popposyan noun. 鶏さん。Category:幼児語。

ponponsyan / ponponsan noun. おなか。腹。Category:幼児語。

R — r

ramumentama noun. ビー玉。Category:子供の遊び道具。

rankyo noun. ラッキョウ。Category:野菜(根菜)。

S — s

sake nomo gotaru verbal phrase. 酒飲みたい。

samuka adjective. 寒い。samukaccuro. 寒かったであろう。寒かったろう。

◆冬の寒さの中を帰ってきた者への家族のいたわりの言葉。筑後市でも使われているという。

sangacumoyogi noun. 分葱(わけぎ)。Category:野菜。

◆呼称は「三月ヨモギ」には非ず。

saruku / sarukimawaru verb. 出歩く。歩く。歩きまわる。

cyotto sokonnikiba saruitekuru. ちょっとその辺を出歩いてくる。

senkogi noun. (米・麦の収穫に使う脱穀用の)千歯扱ぎ。Category:農業用具。

seyan verbal phrase. ~しなければならない。

gohoozi seyan. ご法事しなければならない。

◆する+義務接辞-yan=せやん。

signin noun. 痺れ。Category:体の状態。

asini signinno itta. 足がしびれた。

sinnosu noun. 尻の穴。Category:体の部位。

◆有明海の名産「ワケンシンノス」に名を留む。

siributa noun. 尻。臀部。Category:体の部位。

siributani bansookoba hattemoroota. お尻に絆創膏をはってもらった。

sirondo noun. (瀬高町松延城の)本丸跡。Category:城跡。

sirondoiva ima hatakeni nattoru. 城の土居は今、畑になっている。

soocine quick verbal response. そういうことなのだね。Category:相づち。

◆cf. soocika = そういう次第か。そういう次第だったとな。

sui verbal phrase. ~しよう。Category:勧誘(提案)表現。

nee syoogi sui. ねー、将棋しよう。

◆sui = 「する」の連用形+勧誘の助動詞。

sukagari noun. おどけ者。Category:人物呼称。

kono sukagariga. このおどけ者が。

sukotaemon noun. 慌て者。Category:人物呼称。

kon sukotaemonga. このあわて者めが。

suragocu noun. 嘘。

omai, suragocu yuuna. お前、嘘をつくな。

suttakumon noun. 怠け者。Category:人物呼称。

kon suttakumonga. この怠け者が。

syacci adverb. どうしても。ぜひ。Category:副詞。

syacci soriba sentodeken. どうしてもそれをしなくてはならない。

syekarasika adjective. うるさい。せからしい。きぜわしい。

◆現在でも se [se] (せ) の音を sye [ʃe] (しえ) と発音する現象が九州一円から南西諸島一帯に必ずまばらに出没する。これが濁音化すると例えば、「銭」が「ぜに」ではなく「じえに」と発音される。この現実が南西諸島にはある。「室町時代の京都の発音 [ʃe] が関東から始まり西へ広がる [se] に駆逐された」⁴ というが、瀬高方言にもまだ人によっては [ʃe] が出没する。

syooke noun. 竹で編んだ箆(ザル)。Category:台所用具・農業用具。

◆冷蔵庫のない昔は、朝食後のご飯は天井から吊るした箆に入れて保存した。また施肥や収穫などの農作業にも重宝するのがこの「ショーケ」だった。

syonnaka verbal phrase. 仕方がない。

moo donkon syonnaka. もう、どうにもこうにもならない。

syotekara adverb. もとより。元来。昔から。

◆英語の from the first と通底する表現。

syotekara sogen yatta. 昔からそうだった。

syumu verb. (目に石鹼が入って)しみる。menosyumu. 目がしみる。

T — t

taburu verb. 食べる。

kono kowa nanden yoo taburu. この子は何でもよく食べる。

-tai sentence-final particle. ~だよ。

syukudaiba syotto-tai. 宿題をしてるんだよ。

tamagaru verb. 驚く。kora tamagatta. これは驚いた。

-tan sentence-final particle. ~だよ。

◆目上の人には-tanmo を用いる。

⁴ 大野晋『日本語の文法を考える』(岩波新書, 1978), pp. 169-70.

tangaku noun. (田や畦にいる)蛙。Category:両生類(トノサマガエルの類い)。

◆奄美大島では蛙をガークと呼ぶが、瀬高方言ではタンガクと言う。これは後に述べるように「田 no ガーク」が「タ N ガーク」に約まったものであろう。

本稿第 11 節で見る如く瀬高方言と奄美北部方言の類似性が顕著な例の一つ。

tongogaki noun. (細長にとんがった)柿。Category:果樹。

◆通常の丸い柿に渋柿と甘柿があるように、トンゴガキにも渋と甘がある。

U — u

uccyau verb. 相手にする。agenka yacuni uccyauna. あんな奴を相手にするな。

udagocu noun. たわけたこと。udagocu yuuna. たわけたことを言うな。

umanma noun. おいしい食べ物。Category:幼児語。

urotayuru verb. あわてる。

◆標準語 urotaeru の訛か。

kyuuni senseeno kinahatta ken urotaetesimoota.

急に先生がお見えになったのであわててしまった。

usicuru / usiteru verb. 捨てる。ara usitetekita. あれは捨ててきた。

uttayuru / uttaeru verb. 転ぶ。倒れる。

asino hikkakatte uttaeta. 足が引っかかって転んだ。

W — w

wakensinnosu noun. (有明海の)イソギンチャク。Category:魚介類。

◆ふつう味噌汁の具にして食すが、現今では唐揚げにするのが人気だという。

wakudo noun. イボガエル。ヒキガエル。Category:両生類。

◆トノサマガエルや牛蛙や高度成長期に米国より渡来の食用蛙とは異なる。

Y — y

yanagimusi noun. カミキリムシの幼虫。Category:無脊椎動物。

yanagimusiwa yaite taberaruttobai. 柳虫は焼いて食べられるんだよ。

yaoikan verbal phrase. 簡単にはいかない。たいへんだ。

kora yaoikan. これは簡単にはいかない。

yatto katto / yatton kanton adverb. 辛うじて。やっと。

yatto katto manioota. やつとのことので間に合った。

yawazo noun. (産卵時に)硬い殻がないまま産まれた卵。Category:鶏卵。

◆甲殻類のエビ、カニ、ザリガニなどの脱皮直後についてもこう呼ぶ。

yoma noun. 流し釣り糸。Category:ウナギ釣り道具。

oziiwa yomaba haete unagiba toriyotta.

叔父は流し釣り糸を長々と流して鰻を捕っていた。

◆yoma hayuru とは海のはえ縄漁と同じ手法で、長いのはえ縄に餌を付けて川に流し仕掛けを完了すること。Huck Finn の“set a trotline”とは断然ケタが違う。

Z — z

ziizi noun. 魚。Category:幼児語。

zonete zonete naran. set phrase. 腹わたが怒りで煮えたぎってならぬ。

zyoru / zyooru verb. (魚などを)捌く。解体する。

sakanaba zyotte moroota. 魚を捌いてもらった。

zyuugemon noun. 強情な性格で我を張る一徹者。Category:人物呼称。

ayacua zyuugemonyan.

あいつは一筋に思い込んで強情に横車を押す頑固者なんだ。

9. 対馬海峡から九州一円を南下し南西諸島にいたるバル地帯

筆者が奉職した大分大学は大分市旦野原(ダンノハル)にある。また故郷の福岡県みやま市瀬高町、その隣町には同市高田町原(ハル)がある。さらに九州に現存する最古の列車駅は、福岡県筑紫野市原田にある JR 原田(ハルダ)駅だ。「原」をこのように「ハ

ル」と名乗るのは大分と福岡の両県だけ。

そして、この「原」を「バル」と濁音化して名告る地域は、対馬壱岐に発し、九州一円を経て、南西諸島に及んでいる。本州、四国、北海道には無い。中でも圧倒的に多いのは福岡県だが、他県にも点在する。このような地域を「対馬壱岐九州南西諸島バル地帯」と名付けたい。これは、以下のように展開している。原則として、該当地を各地1例のみ記す。

対馬海峡では：

- 長崎県対馬市厳原町下原（シモバル）
- 長崎県壱岐市郷ノ浦町片原触（カタバルフレ）

九州本島では：

- 長崎県佐世保市世知原（セチバル）
- 佐賀市八反原（ハッタバル）
- 福岡県大野城市白木原（シラキバル）
- 熊本県の西南戦争古戦場、田原坂（タバルザカ）
- 大分県別府市十字原（ジュウモンジバル）
- 宮崎県新富町の洪積台地、新田原（ニュウタバル）
- 鹿児島市桜島赤生原（アコウバル）町

九州本島を離れて南西にくだと：

- 鹿児島県奄美大島本島奄美市笠利町打田原（ウッタバル）
- 鹿児島県奄美諸島沖永良部島和泊町西原（ニシバル）
- 沖縄県名護市運天原（ウンテンバル）
- 沖縄県島尻郡南風原（ハエバル）町
- 沖縄県島尻郡与那原（ヨナバル）町
- 沖縄県宮古列島宮古島市上野野原（ノバル）
- 沖縄県八重山列島石垣島市伊原間（イバルマ）
- 沖縄県八重山列島石垣島市白保竿根田原（ネタバル）

以上の各所に「対馬壱岐九州南西諸島バル地帯」が出来た言語現象は、これを産み出す何らかの祖語の存在を考えないかぎり、この地帯での「バル」の共有現象が説明できない。

10. 奄美琉球語におけるア行アイウイウの3母音と瀬高方言の類似性

エがイに転じる事例は、以下のとおり：

- | | | |
|---------------------------------------|---|-----------------------|
| [やまとことば] | ➡ | [瀬高方言] |
| ・俺 (おレ [re]) が | ➡ | 俺 (おり [ri]) が |
| ・誰 (だレ [re]) が | ➡ | 誰 (だり [ri]) が |
| ・何とかかんとか | ➡ | 何(キ[ki])ろんかん(キ[ki])ろん |
| ◆何(テ[te])ろんかん(キ[te])ろん(瀬高方言)をこうも表現する。 | | |
| ・仏 (ほとケ [ke]) さん | ➡ | 仏 (ほとキ [ki]) さん |

オがウに転じる事例は、以下のとおり：

- | | | |
|---------------------------------|---|--------------------------|
| [やまとことば] | ➡ | [瀬高方言] |
| ・大 (オオ[o:]) 人形さん | ➡ | 大 (ウー[u:]) 人形さん |
| ・大 (オオ[o:]) ご (ト[to]) になる | ➡ | 大 (ウー[u:]) ご (ツ[cu]) になる |
| ・大 (オオ[o:]) 騒動した | ➡ | 大 (ウー[u:]) 騒動した |
| ・(オオ[o:])ざっぱな | ➡ | (ウー[u:])ばんげなか |
| ◆「(オオ[o:])ばんげなか」(瀬高方言)をこうも表現する。 | | |
| ・大 (オオ[o:]) 損した | ➡ | 大 (ウー[u:]) 損した |
| ・馬のご (ト [to]) く食べる | ➡ | 馬んご (ツ [cu]) 食ぶる |
| ・喜 (よろコ[ko]) んで | ➡ | 喜 (よろクー[ku:]) で |
| ・それだけ◆方言「そがっ(シヨ[syo])」 | ➡ | そがっ(シュ[syu]) |

こうしてみると、瀬高方言もひょっとすると、奄美琉球方言のようにア行が「アイウイウ」という3母音の世界を保持する、あるいは、そこに入り込む可能性もあったのかもしれない。

オがウに転じる方言は、瀬高では、筆者より前の世代はよく使っていた。だが、現代の瀬高町の若者は、使えないかもしれないし、知らないかもしれぬ。

ちなみに、エがイに転じ、オがウに転じるからくりは、次のようになるのではありますまいか。

ア イ ウ エ ([ia]と[ai]に由来する母音)	オ ([oi]と[ui]に由来する母音)
↓ ↓	↓ ↓
イ イ	ウ ウ

なんとなれば、大野晋氏の指摘にあるように「古代日本語では母音が二つ連続することを徹底して避けるという特性があった」⁵とすれば、成立した音韻の時代的流れをエとオが逆順にたどるとイとウに帰着し、アイウのいずれかを選ぶほかない。

つまり、エの場合は、(イ[i])(ア[a])のいずれかから、オの場合は、(オ[o])(ウ[u])(イ[i])のいずれかからえらぶほかない。世界の言語のなかでも重要度最大の母音であるアは、このア行母音アイウエオの筆頭にすでに位置するので、選択肢から外すしかない。とすると、第4母音エは、第2母音(イ[i])に転じる。

こうなると、オの場合、残る選択肢は(オ[o])(ウ[u])の二つだが、(オ[o])を選ぶのは自家撞着にひとしい。よって、第5母音オは、第3母音(ウ[u])を選択するほかない。かくして、母音はアイウイウの3つだけになったのではないか。

大野晋氏が指摘する古代日本語の特性に則って、以上のように考えると、奄美琉球のア行の3母音がアイウイウとして成立したプロセスが理解できる。同時に、瀬高の方言が奄美語や琉球語と似た現象が生まれる仕組みも理解できる。

11. 瀬高方言と奄美大島北部方言における酷似表現事例とその解説

本節で依拠する資料は、田畑千秋著『奄美大島の口承説話 —— 川畑豊忠翁・二十三夜の語り』(第一書房, 2005年)である。この書物に収録された川畑豊忠氏(奄美大島大和村名音の生まれ育ちで奄美大島北部方言の話者)の説話に出てくる言語が、筆者の生まれ育った瀬高方言と瓜二つの場合がある。以下に示すのは、その種の表現をアトランダムに拾い集め、それに瀬高方言を併記し、ごく手短かに解説を加えた表現集である。

瀬高方言と奄美大島方言は今日、表現に相当の隔たりがある。だが、ここに取りあげる酷似表現に見るかぎり、双方の方言祖語は同じであったろうと推察せざるを得ない。そういう事例集でもある。

但し本節には、酷似項目が方言のみならず標準語からなる事例も数多含まれる。

⁵ Ibid., 198.

☆ 凡 例 ☆

(奄) = 奄美語方言() = 著者田畑氏の日本語訳 [p. 99] = 著書の数

(瀬) = 瀬高方言 () = 本稿筆者の日本語訳

◆ = 本稿筆者の解説

01 (奄) アスイディ (遊んで) [p. 99]

(瀬) アスデ (遊んで)

◆2014年現在80歳以上の瀬高人は「アスデ」を日常生活で使うことができる。この方言は、(奄)(瀬)でまったく同じ意味をもち、活用も同じ。

02 (奄) アスバラン (遊べなかった) [p. 343]

(瀬) アソバレン (遊べない)

◆意味は(瀬)の場合、現在形の「遊バレン」では「遊べない」の意のみ。「遊べなかった」は(瀬)ではアソバレンカッタとなる。「ラ」が「レ」となるのは母音が3つか5つかの違いだけで、双方は同一語とみなしてよい。

03 (奄) アミヌ クサンファナン スガトウティ (アリが草の葉にしがみついでいて) [p. 276]

(瀬) アリノ クサンハニ スガリツィトッテ (アリが草の葉にしがみついでいて)

◆(瀬)では「しがみつく」は「すがりつく」とも言う。ちなみに、「アリ」のことを(瀬)では「スガリ」と言う。

04 (奄) アレモン シギヤ (洗濯をしに) [p. 340]

(瀬) アライモン シゲ (洗いのをしに)

◆「洗い物」は(奄)アレモンと(瀬)アライモンとに別れている。双方を舌先で転がしてみると、「着物」を(宮崎市青島のように)キモンと言うか、それとも(瀬)のようにキモンというかの別れに等しい。シギヤもシゲも母音省略法の法則を適用すれば同一ことば。

◆◆長崎県島原半島でも「洗もんシギヤ行く」とか「買もんシギヤ行く」または「桜ば見ギヤ行く」と今も普通に使うことを本稿筆者は確認した。

05 (奄) アーロガ (あるだろ) [p. 219]

(瀬) アロガ / アローガ (あるだろうが)

◆(奄)がアーと長音化するだけで、その他の違いはない。

06 (奄) イエークソ (イエークソ) [p. 270]

(瀬) エークソ (エークソ)

◆「エー」は「いらいらしたりした時に発する声」である感嘆詞の「えい」に由来する。「クソ」も「人または物をののしったりする時に発する語」であり、感嘆詞であることは「えい」と同じ。(瀬)では、いらいらしてやけくそになり短気になったりした時によく発する。

07 (奄) イッピユ ズイツィ (一俵ずつ) [p. 151]

(瀬) イッピユ ズツ (一俵ずつ)

◆(瀬)では「一俵二俵」を「イッピユニヒユ」と言う。「俵」を数える方言がいつの昔からか共有されていたことを示す事例。

08 (奄) ウーソードー シ (大騒ぎになって) [pp. 83, 156 and 338]

(瀬) ウーソード シテ (大騒動して)

◆「アイウ」だけの母音が奄美琉球の特徴だという。(瀬)でも同様に母音「オ」が「ウ」になることがある一例。

09 (奄) ウムイズイヌ (大水が) [p. 203]

(瀬) ウーミズノ (大水が)

◆(奄)のヌは第5母音「オ」が第3母音([ウ])と化す。(瀬)のノは、(瀬)には母音5つあるので、第3母音化せずに第5母音「オ」に留まっている。

10 (奄) ウン ママ ヒンギテ (そのまま逃げて) [p. 211]

(瀬) ソン ママ ヒンニゲテ (そのまま[ひん / けー]逃げて)

◆指示詞は(奄)で「ウ」、(瀬)で「ソ」となるのは公式の一つ。また、(奄)(瀬)で使うヒンは、強意の接頭辞だが、(瀬)では「ヒン逃げる」のほかに「ケー逃げる」とも言う。意味は同じ。

- 11 (奄) オモチン (思っ^ていても) [p. 276]
 (瀬) オモチン (思っ^ていても / 思っ^ても)
 ◆両者まったく同じで発音、意味、ともに差異は認められない。
- 12 (奄) ガーク (雨蛙) [p. 287]
 (瀬) タンガク (蛙)
 ◆(奄)では「蛙」のことをガークと言うと知って、筆者は(瀬)で「蛙」をタンガクと呼ぶわけが分かった。「田のガーク」つまり「田Nガーク」だったのだ。
- 13 (奄) カシエφ シュタン (手伝いをする) [p. 149]
 (瀬) カセφ スタン (手伝ってやるぞ)
 ◆「カセ」は「加勢」のこと。九州本土でも「セ」を「シエ」と発音する住人が各県に見られる。なお、(瀬)で「スタン」は、同等か目下の者に対して使い、目上には「スタンモ」と言う。
- 14 (奄) ガッシュベェリ (それくらい) [p. 149]
 (瀬) ソガッシュ (それだけ / それほど / それくらい)
 ◆まるで同じ語根の共有だ。ただ、(瀬)に「ベェリ」ということばは無い。(奄)では「ばかり」の意だとのこと。
- 15 (奄) カミサマチャ オモワン (神様とは思わない) [p. 187]
 (瀬) カミサマチャ オモワン (神様とは思わない)
 ◆「チャ」と「チャ」に、意味上、ほとんど違いはない。
- 16 (奄) ガントウ ビッキヤトウ (カニとカエルと) [p. 299]
 (瀬) ガネト ビキタント (カニとカエルと)
 ◆(瀬)ビキタンはヒキガエルの意。(瀬)ビキタンの「ビキ」は(奄)と同根だが、(瀬)ではそれに「タン」を愛称として付ける。双方の語根は同じ。

17 (奄) ケィンブツ シギヤ (見物に) [p. 189]

(瀬) ケンブツ シゲ (見物しに)

- ◆ 「～しに」という表現で(瀬)のシゲが(奄)ではシギヤになるのは奄美琉球語の母音変化の法則であり、双方はまったくの一卵性双生児。
- ◆◆先述の 04 の解説をも参照のこと。

18 (奄) タカラムンナ ブンニヤグティ (宝物を放り出して) [pp. 304-05]

(瀬) タカラモンナ ブンナゲテ (宝物は放り投げて)

- ◆ 「放り投げる」行動の様態を適確にとらえた表現が共有されている。

19 (奄) ケィムンナ (ケィムンは) [p. 97]

(瀬) キモンナ (着物は)

- ◆ケィムン(妖怪名)とキモン(着物)は共に主格の名詞。こういう主格を示す格助詞は標準語では「ハ」となるが、それを方言では(奄)(瀬)は共に「ナ」という助詞で表現する。これは偶然の一致ではない。

20 (奄) クウン ハナシヤ (この話は) [p. 82]

(瀬) コン ハナシヤ (この話は)

- ◆母音変化の法則で「コ」は「クウ」になるので、(奄)(瀬)(島原半島)は同一方言だという一例。

21 (奄) シリヤーン フリ シュティ (知らぬふりして)

(瀬) シラーン フリ シテ (知らぬふりして)

- ◆「リヤーン」と「ラーン」というふうに、この部分を長音化して発音するところまで似る。双方の語の原初形態は同一ではなかったか。

22 (奄) チャ、クウン インナ (ああ、この犬の奴) [p. 182]

(瀬) アチャ、コン インナ (うわあー、この犬は)

- ◆感嘆詞、指示詞、共通語の主格「は」に相当する格助詞「ナ」にいたるまで(瀬)(奄)に一目瞭然の共通点がある。

- 23 (奄) トウシヤ タシカ サンジューシチ (年は確か三十七) [p. 59]
 (瀬) ヌシヤ トシヤ イクツカ? (お前は年は幾つだ?)
 ◆「シヤ」と「シャ」は、「シハ」が音便化したもので、実質は同一。なお、島原半島にもこのヌシヤやオドミヤがあることを本稿筆者確認済み。
- 24 (奄) トウキキリヤン トウキンニヤ (解けなければ) [p. 205]
 (瀬) トキキラン トキニヤ (解くことができない時には)
 ◆「～シキラン」のように「～できない」ことを言う活用形が双方の方言に見られる。「～ニヤ」は、「～には」の意であることも同じ。
- 25 (奄) トウマリクウディ (泊まり込んで) [p. 88]
 (瀬) ト マリクーデ / トマリコーデ (泊まり込んで)
 ◆両者の違いは、母音が3つであるか5つであるかの違いのみで実質は同じ。
- 26 (奄) トーリキリヤン (通れない) [p. 364]
 (瀬) トー リキラン (通ることができない / 通りおおせない)
 ◆標準語の「通れない」は、(瀬)の方言では「トーレン」または「トーラレン」。
 (瀬)の「トーリキラン」は、人間主体が通る能力がない時につかう表現。
- 27 (奄) ソーケユヌ (竹籠に) [pp. 66 and 244]
 (瀬) ショーケニ (箆に / ショークに)
 ◆竹をそぎ割ったものを編んで作った竹籠を共通語では「箆(ざる)」と言うが、(奄)も(瀬)もこれを「しょうけ」と呼んでいる。
- 28 (奄) クウラ (これは) [p. 97]
 (瀬) コオーラ / コラ (これは)
 ◆「コ[ko]」が「クウ[ku]」になる母音変化の法則どおり。

- 29 (奄) ナゲイクダ (投げ込んだ) [p. 124]
 (瀬) ナゲ クーダ (投げ込んだ)
 ◆(奄)でコ[ko]が「ク[ku]」に、つまりオがウに転じる母音変化と同一の変化が、この(瀬)の方言にも見られる典型的一例がこれ。
- 30 (奄) ナンクダ (投げ入れた) [p.130]
 (瀬) ナンク ダ / ナンクーダ / ナンコダ (投げ入れた / 投げ込んだ)
 ◆(奄)と(瀬)が方言を共用し、活用形もほぼ同じと知れる。
- 31 (奄) ニンギンヌ クワーバ トウティ (人間の子を獲って) [p. 369]
 (瀬) ニンゲンノ コ バ トッテ (人間の子を獲って)
 ◆共通語の目的格の助詞「～を」は、(奄)と(瀬)の方言では「～バ」となる。
- 32 (奄) ハジムィティ ヌダ (はじめて飲んだ) [p. 120]
 (瀬) ハジメテ ノーダ (はじめて飲んだ)
 ◆「ヌダ」「ヌーダ」「ノーダ」の変遷によるものか。
- 33 (奄) ハナサラン (話せない) [p. 215]
 (瀬) ハナサレン (話せない)
 ◆(瀬)レが(奄) ラに転じるのは、母音変化の法則どおり。
- 34 (奄) ～バ「マラ」チ イョーロガ (～を「マラ」と言うだろ) [p. 324]
 (瀬) ～バ「マラ」チ イヨロガ (～を「マラ」と言っているだろうが)
 ◆(奄)(瀬)は、共通語では「と」となる伝聞の副助詞「チ」を共有する。
- 35 (奄) フティン ティティン (降っても照っても) [p. 377]
 (瀬) フッテン テッテン (降っても照っても)
 ◆(瀬)では冒頭部分が促音便になる傾向が強い。筆者の given name 「みつしげ」を「ミッシェ」³と促音便で呼ぶ人間は周囲に数多。

- 36 (奄) ファトゥヌ ウティトゥ (ハトが落ちている) [p. 370]
 (瀬) ハトノ オテトル (ハトが落ちている)
 ◆「落ちている」を「落テトル」と言うのは(瀬)だが、九州でもあまり聞かないような気がする。奄美大島にそれがあるとは一驚。
- 37 (奄) マドケィ (弁償してくれ) [p. 193]
 (瀬) マドエ / マドックレ (弁償しろ / 弁償してくれ)
 ◆「マドウ」の語根が(奄)(瀬)で同じだと考えられる。
- 38 (奄) ユタリ (四人) [p. 320]
 (瀬) ヨッタリ (四人)
 ◆(奄)では母音オがウに転じるので、ヨ[yo]がユ[yu]になるのは道理。となれば、(瀬)方言の促音便ぐせを差し引くと、両者は同じになる。
- 39 (奄) ヤットンカットン (やっとの思いで) [p. 137]
 (瀬) ヤットンカントン (やっとかつと / やっとのことで)
 ◆瀬高方言のなつかしさをば満喫させてくれる奄美方言の等価物。
- 40 (奄) ユフドゥティ (休んでいると) [p. 312]
 (瀬) ヨコドット (休憩していると / 一休みしていると)
 ◆(瀬)のヨコウは「休む、休憩する」の意。ヨコドルは「休んでいる」を意味。ヨ[yo]がユ[yu]になるのは 38 でも触れた通り。
- 41 (奄) ユルクディ (喜んで) [p. 231]
 (瀬) ヨロコーデ / ユルクデー (喜んで)
 ◆豊後浄瑠璃では「ユルクージ」となる。ヨとユの母音変化は 38~40 で既述。

12. 本稿成立の端緒と謝辞

「瀬高方言」を文章で紹介して欲しいとの要望が、本稿成立の端緒となりました。以前「筑後柳川藩領瀬高方言の格表示」と題して2015年6月27日、同志社大学今出川キャンパスでの類型学会で発表した原稿もあり引き受けました。だが、2021年6月25

日に着手して11月下旬までかかってしまう。

ただの方言紹介なのに、やっとここまで辿り着けたのは松本泰丈氏と田畑千秋氏のご指導と温情あるみちびきのおかげですし、さらに国立国語研究所の危機言語調査に加えて頂き奄美語に実地に接し得たのは大島一氏に負うところ大です。各位にお礼を申し上げます。松岡葵氏には筆者のPC不具合で閲覧できなかった「下地理則の研究室・方言グロスリスト」を含む複数の資料を提供していただき、さらには、高校でクラスを共にした気のおけない友人四名にも大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

そして、憚り乍ら、私を育ててくれた亡き祖母に本稿を捧げたいと思います。

13. 本稿の参考文献リスト

本稿の一部は、2015年6月27日開催の類型学会において「筑後柳川藩領瀬高方言の格表示」と題して同志社大学今出川キャンパスで発表した原稿に基づいている。

このたび新たに参考にした文献は、以下のとおり。なお、本文中や脚注などで紹介済みの文献等は、以下のリストから、すべて外している。

- 大野晋・丸谷才一『日本語で一番大事なもの』中公文庫、2016年。
 大野 晋編『古典基礎語の世界 — 源氏物語のもののはれ』角川ソフィア文庫、2012年。
 大野 晋『日本語の源流を求めて』岩波新書、2007年。
 ———『日本語と私』新潮文庫、2003年。
 ———『日本語の水脈』新潮文庫、2002年。
 ———『日本語の教室』岩波新書、2002年。
 ———『日本語はいかにして成立したか』中公文庫、2002年。
 ———『日本語練習帳』岩波新書、1999年。
 ———『古典文法質問箱』角川ソフィア文庫、1998年。
 ———『大野晋の日本語相談』朝日文芸文庫、1995年。
 ———『日本語の年輪』新潮文庫、1966年。
 丸谷才一『ゴシップ的日本語論』文春文庫、2007年。
 ———『完本日本語のために』新潮文庫、2001年。
 ———『丸谷才一の日本語相談』朝日文芸文庫、1995年。
 田畑千秋『奄美・沖縄女のことわざ』第一書房、1997年。
 ———『奄美の暮しと儀礼』第一書房、1992年。
 G. A. クリモフ著、石田修一訳『内容類型学の原理』三省堂、2016年。
 松本泰丈『連語論と統語論』至文堂、2006年。
 山口 巖『ロシア文法の周辺 — 一般言語学への招待』日本古代ロシア研究会、2005年。

- 井上ひさし『井上ひさしの日本語相談』朝日文芸文庫、1995年。
大岡 信『大岡信の日本語相談』朝日文芸文庫、1995年。
板坂 元『日本語横町』講談社学術文庫、1978年。